



題字揮毫・瀬島龍三氏

第 11 号

財団法人 大東亜戦争全戦没者
慰霊団体協議会

〒105-0014 港区芝2-5-19
TAビル4階

電話 03 (5730) 0421
FAX 03 (5730) 0422

<http://homepage2.nifty.com/ireikyoku>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能

発行人 柚木文夫

印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

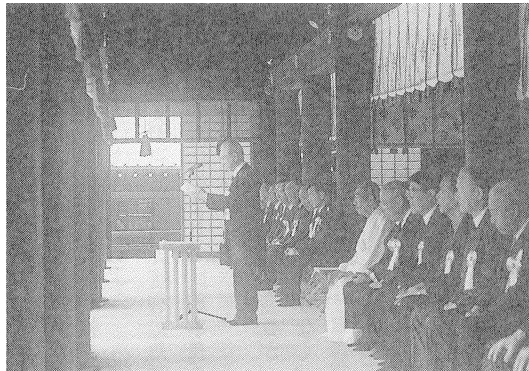
大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭	1
皇后宮美智子様祈りの御歌	3
『源氏物語』と「大和魂」	6
第42回特攻殉国者慰霊祭	6
遺烈 (IYMA)	8
協議会参加団体の紹介⑩	11
事務局からの報告	14
新入会員名簿等	16



平成20年7月5日(土) 正午より、靖國神社において、当協議会並びに当協議会参加諸団体の主催による、平成20年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」が、御来賓、参加各団体代表、賛助会員等約180名の参加を得て、厳粛かつ盛大に齋行された。

今回は、当協議会の名誉総裁であられる三笠宮崇仁親王殿下には、御体調の御都合により、御臨席はお取り止めとなったが(編注・三笠宮殿下におかれては、先頃、聖路加国際病院に御入院、治療をお受けになりましたが、7月2日には御退院、その後の経過も御順調と承っております。御平癒を心よりお祈り申し上げます。)、この日は梅雨の晴れ間、薄曇りながら爽やかな緑の風が吹き渡る拜殿に、一同参列し、一心引き締まる中、式典は開始された。

トランペットの伴奏により、全員起立して国歌を斉唱した後、神官による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が続き、次いで、新任の山本卓真会長が別掲のとおり祭文を奏上し、英霊の御前に、更なる慰霊団体協力の輪を広げ、慰霊顕彰事業の永続と国民精神の作興を図るため全力を傾注することを、お誓い申し上げた。



祭文奏上は山本卓真会長

次いで、奉納演奏は、世田谷コールエーデ合唱団による「埴生の宿」「千の風になつて」の二曲が合唱された後、一同起立し、トランペットの伴奏により「海ゆかば」を斉唱した。合唱並びに斉唱の声は神苑に飴し、爽やかな風に乘つ

祭文

本日、ここに、平成二十年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙行するに当たり、謹んで全戦没者の御霊の御前に、慰霊の言葉を申し述べます。

過ぐる大東亜戦争におきましては、多くの方々が、同胞の安泰を願い、祖国の安寧を願って、苛烈悲惨な戦場に赴き、辺境の地において、故国に残した家族を思い、妻子の安否を気遣いながらも、勇戦敢闘して、戦場に散って逝かれました。その数、二百数十万人に及んでおります。今日、我が国民は、豊かで平和な生活を享受しておりますが、この豊かで平和な生活は、これらの戦場に散って逝かれた、多くの

方々の犠牲の上に築かれたものであることを、私どもは決して忘れることは出来ません。

しかしながら今日、平和と繁栄が続く長い歳月の経過の中に、いつしか、戦没者に対する慰霊の心が風化しつつあることが憂慮されます。加えて、最近の世相を眺めると、公に対する責任感が希薄化し、人倫に悖る行為も多発するなど、国民精神の退廃が懸念されるのであります。ここにおいて私どもは、戦没者慰霊事業の永続を願

い、それを通じて国民精神の作興を図るため、戦没者慰霊諸団体と相諮り、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会を設立いたしました。設立後三年を経過した今日、参加団体は十九団体を数え、本日のこの合同慰霊祭は、これら諸団体と共に催行する運びとなったもので

あります。

私ども協議会は、今後とも慰霊団体協力の輪を広げ、戦没者の慰霊顕彰事業の永続を図り、もって国民精神の作興を図るため、全力を傾注して参る所存であります。

ここに、協議会参加諸団体と共に、在天の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、どうか私どもにも、なお一層の御加護とご導きを賜りますようお願い申し上げます。

平成二十年七月五日

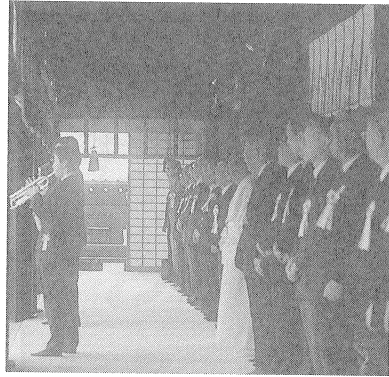
財団法人大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

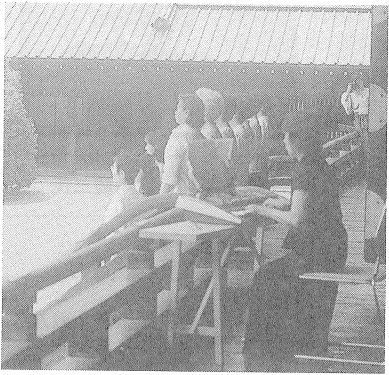
会長 山本 卓真

直 会

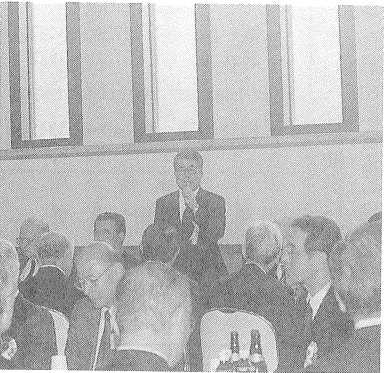
式典を終わり、13時30分から、会場



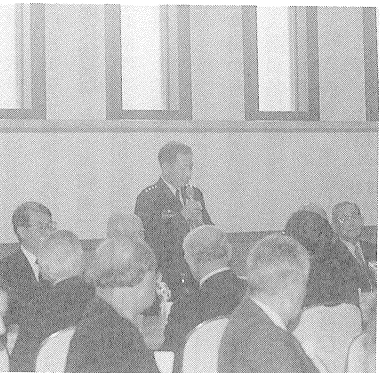
「海ゆかば」斉唱



献歌 世田谷コールエーゼ合唱団



林崎千明水交會會長挨拶



田母神俊雄航空幕僚長挨拶

を靖国会館2階「偕行の間」に移し、御来賓、参加団体各代表、賛助会員等約130名が参集して直会が執り行われた。

直会はず、当協議会柚木文夫理事長の開会の辞に始まり、同理事長の司会によって進められた。

当協議会を代表して山本会長が、本日の合同慰霊祭式典が、滞りなく、厳肅かつ盛会裡に終了したこと、齋行に当たり、参加各団体代表者等から受けた絶大なる御支援・御協力に厚く感謝の意を表するとともに、今後とも、慰

霊事業の永続を図るため、一層の御支援を賜りたい旨の挨拶を行った後、御

来賓を代表して財団法人水交会の林崎千明会長が挨拶をされた後、更に現役

自衛官を代表して田母神俊雄航空幕僚長が挨拶をされたが、同航空幕僚長は、

制服で昇殿参拝、玉串奉奠をされ、後に続く者を信じて散華された英霊に対する誠の心を身をもって示されただけに「先人の遺志を受け継ぎ、国防の重責を果たし、国民の負託に応えたい」との誠に頼もしい挨拶をされた。

次いで御来賓の紹介があり、御来賓を代表して「新生つばさ会」の杉山審会長の御発声により、一同靖國の御霊に献杯した後、懇談会食に移った。

和やかな雰囲気の下に、懇談会食は約1時間に及び、最後は、財団法人偕行社の齋須重一副会長の御発声により「天皇陛下万歳」を三唱して締め括った後、司会者の閉会の辞とともに、一同来年の催行を期して解散した。

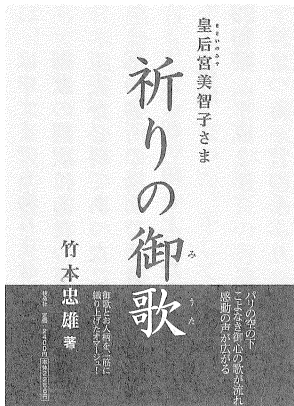
誠に心洗われる思いの合同慰霊祭であった。

皇后宮美智子様

祈りの御歌



平成19年10月撮影



一昨年、今上皇后陛下の御歌53首の
 仏語訳御撰歌集『Seoto Le chant
 du gne』「セオトーせせらぎの歌」が、
 パリのシゲナトウラ社より刊行され、
 フランスを始めとしてヨーロッパやア
 フリカのフランス語圏で静かなブーム
 となり、世界の人々の感動を呼び起こ
 しているという。その著者（訳者）は
 筑波大学名誉教授、コレージュ・ド・
 フランス元客員教授で長年パリに在住
 し、文化、美術、評論活動を続けてこ
 られた竹本忠雄氏であり、昨年帰国さ
 れ、この程その翻訳過程と反響等を交
 えて綴った日本語版『皇后宮美智子様
 祈りの御歌』として扶桑社から刊行さ
 れた。「きささいのみや」とは、皇居に
 おける新年「歌会始」の儀において、
 皇族方の御歌の披講に当たり、講師が
 古い大和言葉で順に御名をお告げする
 際、皇太子妃殿下を「ひつぎのみこの
 みめ」（日嗣の御子の妃）、皇太子殿下を
 「ひつぎのみこ」（日嗣皇子）、皇后陛下
 を「きささいのみや」（後の宮・皇后宮）
 と告げられているのを聞いて感動し
 （なお、天皇陛下は、御題に次いで、
 ただ、「おほみうた」とのみ告げられ
 る）、大和言葉の美しさ、言霊という
 よりも音霊ともいふべき、言の葉の持
 つ靈性に魅せられたという。「きささい」
 は「きささき」の音便形であるが、むし
 ろこの呼び方の方が喚起力があり、
 「きささいのみや」とお呼びすることに
 よって、一瞬、皇后陛下は、ただひと
 り、古代の神まつりの齋庭にお立ちに

なられるのである。そして、歌会始の
 会場は、往古の祈りの場へと転換され
 る、と著者は言っている。
 皇后宮美智子様は、優れた歌人であ
 られる。と共にその御歌には深い祈り
 や慈しみの御心が込められており、靈
 性とも霊力とも言うべき不思議な力、
 人々の心に深い感動を与える力を持っ
 ている。何よりも純粹で繊細な御心が
 偲ばれる御歌である。その幾首かを次
 に掲載させていただくこととする（頭
 番号は、御歌53首の御撰歌集の掲載
 番号である）。

1 常磐松の御所（昭和34年）
 てのひらに 君のせましし
 桑の実の その一粒に
 重みのありて

2 浩宮誕生（昭和35年）
 あづかれる 宝にも似て
 あるときは 吾子ながらかひな
 畏れつつ抱く

5 秋蚕（昭和41年）
 真夜こめて 秋蚕は繭を
 つくるらし ただかすかなる
 音の聞こゆる

（原註・日本では宮廷での養蚕は古
 代から行われてきました。八世紀
 に孝謙天皇が携わられたというこ
 とが既にある古歌に記されていま
 す。この伝統にもとづき、現在で

も皇居内の六ヘクタールの地に四
 一五〇本の桑の木が植えられ、
 皇后様みずから五月から六月の間
 に御養蚕にいそしんでおられます。
 皇后様が大切にはぐくんでこられ
 た「小石丸」という純日本産蚕の
 絹糸は、通常の絹糸の二分の一程
 度の太さしかありません。皇后陛
 下の格別のお力添えにより、千二
 百五十年前の奈良の正倉院の御物
 に収められた見事な織物十九点が、
 十年の歳月をかけて、この「小石
 丸」の絹糸を使って復元され、い
 まなお、御物の復元は継続中です。
 （中略）なお、御歌に詠われる
 「秋蚕」とは、七月から八月にか
 けて飼われるものをさして、そう
 呼びます。皇后様がこれをお詠み
 になったのは、まだ皇太子妃のこ
 ろ、皇室のお仕事としてではなく、
 夏の避暑地でお子様方とともに小
 規模に育てていらつしやったとき
 のことでした。）

6 秋蚕（昭和41年）
 時折に 糸吐かずをり 薄き繭の
 中なる蚕 疲れしならむ

10 アフガニスタンの旅（昭和46年）
 パーミアンの 月ほのあかく
 石仏は 御貌削がれて
 立ち給ひけり

(原註・一九七二年(昭和四十六年)

六月、皇太子・同妃時代の天皇皇后両陛下は、アフガニスタン御訪問中に、同国中央に位置する四世紀の広大な仏教遺跡バミヤンをお訪ねになりました。その折、皇后様は、そこに立つ巨大な二体の磨崖仏(各、高さ五五、及び三八メートル)を御覧になり、おそらくは異教徒によって無惨にも二体とも顔面を削り取られたさまに衝撃を受け、このように詠まれたのでした。)

24 歌会始御題「音」(昭和56年)

わが君の み車にそふ 秋川の 瀬音を清み ともなはれゆく (原註・本書の「瀬音」という題名そのもののなかに含まれる、この「音」という語は、日本の感受性において最も重要な言葉の一つと言えましよう。)

日本人の感覚としては、森羅万象の発するものごとごとく「おと」として捉えられますが、西洋では一般に、人間の作った「サウンド」(フランス語では「ソン」と、そうでないもの、しばしば「ノイズ」とに分けられます。)

(中略) 歌人美智子様の芸術的感性が優

れて「音」に敏感であられることは申すまでもありません。そこで、御歌の翻訳にあたってさまざまの工夫が必要であったことは、第一部の御所の場面で著者より皇后陛下にご報告申し上げたとおりです。(後略)

29 句祭(平成2年)

神まつる 昔の手ぶり 守らむと 句祭に発たす 君をかしこむ (原註・句祭とは、九世紀に端を発する神道祭儀で、宮中三殿において毎月三回、一日と、十一日と、二十一日に行われます。この一日の句祭は、天皇おんみずから国家鎮護を祈つての、最も厳肅なる執行となります。この御歌で皇后様は、明治天皇の御製「わがくには神のすえなり 神まつる昔のてぶり忘るなよゆめ」を想起しておられるものと拝察されます。)

32 ニユース(平成3年)

窓開けつつ 聞きあるニユース 南アなる アパルトヘイト法 廃されしとぞ

33 鳥渡る(平成3年)

秋空を 鳥渡るなり リトアニア、 ラトビア、エストニア 今日独立す

38 歌会始御題「波」(平成6年)

波なぎし この平らぎの 礎と 君らしづもる 若夏の島 (原註・「うりずん」とは、沖縄の言葉で「若夏」をあらわす。)

39 硫黄島(平成6年)

慰霊地は 今安らかに 水たたふ 如何ばかり君ら 水を欲りけむ (原註・(前略)終戦五十周年に先立って、一九九四年(平成六年)二月十二日、天皇皇后両陛下は同島を訪ねて勇敢なる戦士の霊鎮めを行われました。両陛下とも、記念碑に浄水をそそいで祈りの歌をささげられたのです。)

40 春燈(平成7年)

この年の 春燈かなし 被災地に 雛なき節句 めぐり来りて (原註・一九九五年春は、神戸周辺の諸地方に、恒例のヒナマツリはありませんでした。大震災のため、六千人余の命が奪われて、広汎の地域が壊滅したからです。天皇皇后両陛下が、打ちひしがれた被災者の前で御身をかがめられて、その手をお取りになる姿に人々は感動させられました。)

42 広島(平成7年)

被爆五十年 広島に 静かにも 雨降り注ぐ 雨の香のして

47 終戦記念日(平成8年)

海陸の いづへを知らず 姿なき あまたの御霊 国護るらむ

50 長崎原爆忌(平成11年)

かなかなの 鳴くこの夕べ 浦上の 万灯すずに 点らむころか

53 歌会始御題「幸」(平成16年)

(天皇御製) 人々の 幸願ひつつ 国の内 めぐりきたりて 十五年経つ (皇后御歌) 幸くませ 真幸くませと 人びとの 声渡りゆく 御幸の町に

本書は、「皇后宮美智子様の祈りの御歌の言霊が、フランス語を通してどのように伝えられ、どんな木霊となつて返ってきたかを、訳者として逐一書きつづけたレポートである」そして、「御歌の高雅な調べは、文化的背景の全く異なるヨーロッパでは如何なる音色を響かせるであろうかと、このことを紹介者としては一番の楽しみとしてみましたが、実際に出版とともに起こった反響はその期待を満たして余りあるものでした」と著者も言っているように、その反響は、素晴らしいものがあったようである。その二、三を紹介すると、次のようなものである。 当時のフランス共和国大統領ジャック

ク・シラク氏は、二〇〇六年五月二十四日付け親書で、「皇后陛下美智子様
の御歌五十三首の御歌撰集『セオト―
せせらぎの歌』を、大使閣下の御厚志
により恵贈たまわり、ただいま、歓喜
をもって拝読しおわったところです。

この御本には、和歌の持つ息吹の力
と、魂の昂揚力とが、絶妙に表されて
おります。

おかげをもって、かかる世界に目を
見開かされました」と。

また、フランスの女流詩人フランチェ
スカ・カルーチさんは、

「皇后陛下美智子様の御歌の光を發
見したことは、私にとって大いなる啓
示でございました。優雅と深層の意味
を兼ね備えた、この円かなる御作品は、
練りかえしこれを拝読して飽きること
を知りません。

『セオト』は、人生の旅路のこよな
き導き、魂を高める教えとして、私ど
もに、より美しい世界があるというこ
とを信じて生きる力をおあたえくださ
います。

この素晴らしい御歌集の仏訳の一端
に携わらせていただいたことは、私の
一生の光栄でございました。ここに、
心より感謝の念をささげさせていただきます
と。

実のところ、著者は、日本会議の月

刊機関紙『日本の息吹』の9月号の
「橋をかける」むすびの世界―皇后陛
下 祈りの御歌」と題するインタビュ
記事の中で、「在仏中に味わった、朝
日とル・モンドの連携を軸とするフラ
ンスの偏向メディアの、あくどい反日

論、例えば、皇室典範の改正問題や南
京大虐殺とか従軍慰安婦問題等につい
て、目を覆うばかりの日本バッシング
が繰り返られていたが、これに対し

て日本の政府機関や政治家など我が方
から正々堂々と反駁する動きは皆無で
あったし、日本の日刊紙が、こうした

反日の実態を一言も伝えようとはしな
かった。そのため、保守系知日家の中
にも歴史認識の問題になると、過った
認識を持ち、それによって信頼関係が
損なわれる怖れが出てきた。ために、
そのような歴史論争の相対的次元を超

えて、真実の高い日本の姿を示すには、
今や皇室しかない、皇室の真の姿を示
すには、御歌に込められた御心を広く
紹介することが最良の方途であると信
ずるようになった。そして、御歌には、
右も左もなく、国や人種にも関係なく、
感動を呼び、すべてに「橋をかける」
日本の靈性を持っている、と考えたか
らである。日本の靈性とは何か、例え
ば、キリスト教的靈性は自然と人間を

分け隔てるところに成り立っているが、

一方、日本的―神道を中心とする―靈
性は、断絶の見出される全ての方向に
橋をかける、結び合わせるところにお
いて成り立っている、国境、人種にか
わりなく、人々を人としての正道に
導いてくださる、これが正に御歌の核
心である」と著者は言っている。

アフリカの奴隷の子孫となった人々
の「アバルトヘイト法」が廃止された
ことを、「ニュース」でお聴きになる

や手放してお喜びになられた、その御
歌を知って、アフリカの人々がどん
に歓喜したか、次のような反応によっ
て知ることができる。

アフリカの南西部、大西洋に面した
アンゴラ共和国の有力紙「アンゴラ新
聞」の二〇〇六年十月十七日付けの文
化欄に次のような記事が掲載された。
「日本国皇后の御歌、アフリカ青年
の育成に活用を！」との見出しの下に
「かねてルアンダの青少年育成道場で
指導に当たっているオデイマーク・デ
ュクロ氏が、一昨十五日、弊社におい
て講演を行い、このほどバリエで出版され
た日本国皇后の歌集『セオト』を絶讃
して、こう述べた。ここに生き生きと
仏訳された和歌は、日本語でコトダマ
と呼ばれる崇高な精神を宿している。
御歌は、ヨーロッパのみならず、アン
ゴラをはじめ、アフリカ中に伝えて、

とくに青少年の情操教育に役立てるべ
きと信ずる―」オデイマーク・デュ
クロ氏は、アフリカ各地で素晴らしい
青少年教育の実績を上げていく国際的
ソシアル・ワーカーであるが、氏の講
演録は「桑の実ひとつぶの重み」と題
されている。そして、その講演の中で、
「ニュース」と題された「窓開けつつ
聞きあるニュース 南アなるアバル
トヘイト法 廃されしとぞ」との御歌
に触れ「皇后陛下美智子様は、こんな
にも苦しんだアフリカの人々のために、
よりよい未来を希望してください。自
由と平和がいつまでも続くようにと祈っ
ていてくださる、何とお心おの寛さ、
魂の偉大さかと、感激させられるほか
はありませんでした」と。そして、最
後に、「日本には、聖母マリアのよう
な『ジボ・カンノン』という神様が
いらっしゃる。まことに皇后陛下美
智子様は、日本の慈母観音であらせら
れます」と絶讃しているのである。

(飯田正能記)

『源氏物語』と「大和魂」

今年、『源氏物語』が著されてから1千年ということで、記念行事も行われているようだが、我が国が誇る、最古かつ不朽の王朝ロマン文学も、それが執筆された時期は必ずしも明らかではない。作者紫式部が、夫筑前守藤原宣孝を亡くして寡婦となり、里籠り

仕えた。当時後宮に仕える女官達には和漢の才に優れ教養の高い者が多かったが、取り分け同時代の清少納言や和泉式部ら才媛の筆頭に挙げられるのが『源氏物語』54帖、『紫式部日記』2巻、家集『紫式部集』等を書いて不朽の名を残した紫式部である。

また、紫式部は、一条天皇に『日本書紀』を進講して、『日本紀の御局』とあだ名されたほどであり、中宮彰子に對しても『白氏文集』を進講したりしているから、文学のみならず、和漢の歴史、詩歌等にも通曉していたものと思われる。

しかも、紫式部が立派だと思うのは、その教育観である。『源氏物語』第21帖「乙女」の中で、光源氏が、それまで祖母の大宮(故葵の上の母)のもとで育てられ、12歳で元服した嫡男夕霧を大学に入学させるについて、大宮に説明する場面で、高貴な身分にある夕霧を、四位になれる特典を敢えて捨て、六位という低い身分のまま大学に入学させた理由を述べている。

をきかせて何でも見下す癖がついてしまうと、苦勞して学問を身につけようという気は、全然なくなってしまう(す)。」と。

更に「なほ才を本としてこそ、大和魂の世に用いらる方も強う侍らめ。さしあたりでは、心もとなきやうに侍れども、つひの世の重しとなるべき心おきてを習ひなば、侍らずなりなむ後も、うしろやすかるべきによりなむ(やはり、才(学問)を基礎にして、はじめ大和魂(實際能力)の効用が発揮されるのです。入学当初は、官位が低くて不満だろうが、最終的に、国家を支える重臣になるべき心構えを習得するならば、私が死んだ後も安心だというわけで入学させました)」と。

その理由というのは「高き家の子として、司・冠心(かむかみ)にかなひ、世の中盛りに驕りならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと速くなむおぼゆべかめる(高い家柄の子に生まれ、官職や位階が思いのままになり、はぶりをきかせて何でも見下す癖がついてしまうと、苦勞して学問を身につけようという気は、全然なくなってしまう(す)。」と。

要は、学問と大和魂とが相互に補完する人間でなければ、国家の重臣は務まらない、とするもので、和魂漢才、つまり日本精神の二重構造が明確に分析されている。この源氏の教育観には、紫式部の父親像が反映していると言われるが、「大和魂」という言葉を使っているが、

て、当時、我が国の精神思想の核に強く影響していた漢才(中国の学問・教養)に対し、日本固有の精神や日本人の在り方を強く意識し、生まれつき

紫式部は、父・式部丞(後越前守、越後守等を歴任)藤原為時の次女として天祿元年(970年)に生まれ、29歳で藤原宣孝と結婚、娘賢子を儲けたが、32歳で夫と死別し、36歳の時に、藤原道長の娘で一条天皇の中宮彰子に

その理由というのは「高き家の子として、司・冠心(かむかみ)にかなひ、世の中盛りに驕りならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと速くなむおぼゆべかめる(高い家柄の子に生まれ、官職や位階が思いのままになり、はぶりを

の感受性や日常生活の中で自然に育まれた精神能力は、日本固有の精神の発

露とみなして「大和魂」と呼んだものと思われ、外敵に挑む果敢な闘争心のみならず、可憐な花を愛でる風流心まで、広く日本人の精神の営みを「大和魂」と呼んだのであろう。今の日本人こそ、紫式部が光源氏をして言わしめた、この「大和魂」という言葉を痛切に噛み締める必要があるのではないか。(飯田正能記)

第42回特攻殉国者慰霊祭

特攻殉国の碑保存会
(長崎県川棚町新谷郷)

第42回特攻殉国者慰霊祭が、去る5月11日(日)14時から、新緑薫る五月晴れの好天の下、長崎県川棚町新谷郷の「特攻殉国の碑」前において、厳粛盛大に執行された(出席者、式次第等は、昨年とほぼ同様であった)昨年の慰霊祭については、会報「慰霊」第6号6頁以下に掲載が、保存会の益田善雄会長は病気のため欠席された。

同地には、昭和19年海軍臨時魚雷艇訓練所が設置され、同所で訓練を受けた多くの若者により、震洋特別攻撃隊、伏竜特別攻撃隊等が編成され、フィリピン、沖繩等の戦線で果敢な特別攻撃を敢行して散華された3367名の英

霊の名を刻した「特攻殉国の碑」が、

いた。

(飯田正能記)

昭和42年5月、元隊員・遺族その他有志一同の手によって、建立された(写真及び碑文後掲)。爾来毎年5月の第2日曜日に慰霊祭が執行されている。

「会長所見 保存会会長 益田善雄

慰霊祭は長年、旧隊員・遺族その他有志を中心とする「特攻殉国の碑保存会」の主権により行われていたが、40余年の紆余曲折を経て、現在では、宗教行事は一切なく、同保存会と地元川棚町新谷郷との共催、海上自衛隊佐世保地方総監と佐世保ガールズ会の支援により行われている。また、碑の所在する土地、建物(倉庫)、金銭等の管理は、地方自治法に基づき法人「新谷郷会」が管理し、保存会がこれを支援している。

第二次大戦において、小艇をもって暗夜、巨艦に突撃する震洋艇や魚雷艇の開発と運用に、一番熱心であったのは日本とイタリア海軍で、イタリアは、第一次大戦におけるオーストリア海軍とのアドリア海における実戦体験に基づいたものであった。

は使用されたが、充実した防備に阻まれて、マルタ島で全艇を失い、失敗に終わっている。

後の戦闘は、降伏直後の6月にフランスの駆逐艦を攻撃、撃沈しており、イタリア軽戦隊の不屈の闘志が窺い知れます。

イタリア海軍は、第二次大戦において、第10軽戦隊が編成され、各種の特別攻撃を企画した。そして、震洋や④艇の原型とも言える爆装高速艇MTMが建造された。この艇は長さ5・2m(震洋一型と同じ)重量1・5tで、300kg(震洋は250kg)の爆薬を持ち、34ノット(震洋は23ノット)の高速で走れる。この艇は、クレタ島スタ湾において、昭和16年(1941年)3月26日に攻撃し、大きな成功を収めた。これは、日本が真珠湾を攻撃する9カ月前であり、この成功は、日本の陸、海軍がこの種小型艇を採用する一つの遠因となったと考えられる。

イタリアの小型艇の戦いの歴史で、特筆すべき事跡がある。それは、イタリアがドイツ、日本を離れ、連合軍に降伏した時に起こった。この降伏の日

の夜、イタリア潜水艦隊の司令官であったボルゲッシー提督に率いられた10隻のMTM攻撃艇が、暗夜ローマを脱出し、北部イタリアに向かい、北イタリアで募兵を行い、北イタリア軍を新しく編成し、英軍の北上を阻止する戦いを展開した。イタリアのMTM艇の最

戦後このイタリア軽戦隊のグループから、我々特攻殉国の碑保存会や震洋会への交流があり、友隊としてお付き合いがあつて、手紙の交換だけではなく、慰霊祭(東京)に参加をしていたこともありましたので、この機会に紹介いたします。」

なお、慰霊祭執行後、保存会事務局長西村金造氏から御丁寧なる礼状に慰霊祭のビデオと昨平成19年度の保存会「会報」を添えてお送りいただいた。

同「会報」は、B5判80頁に及ぶ立派な内容のもので、第41回慰霊祭の報告記事を始め、御遺族、旧隊員その他の会員からの通信文等多数が掲載されており、海上自衛隊、当協議会関連記事まで掲載されている。その中の保存会会長益田善雄氏の「会長所見」と題する巻頭言は貴重な資料でもあるので、御了承を得て、次に転載させていた

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

外舷エンジンであり、突入後パイロットはフロートにうつ伏せになり、爆発時の腹へのショックを和らげるようになっていた点である。

MTMが日本の震洋艇と違うのは、

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

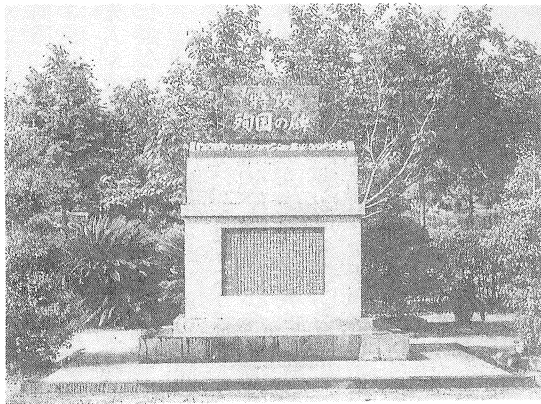
この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇

この後、マルタ島の攻撃にもこの艇



碑文

昭和19年、日々悪化する太平洋戦争の戦局を挽回するため日本海軍は臨時魚雷艇訓練所を横須賀からこの地長崎県川棚町小串郷に移し魚雷艇隊の訓練を行なった。魚雷艇は魚雷攻撃を主とする高速艇でペリリュー島の攻撃、硫黄島最後の撤収作戦など太平洋、印度洋に活躍した。更にこの訓練所は急迫した戦局に処して全国から自ら志願して集まった数万の若人を訓練して震洋特別攻撃隊、伏電特別攻撃隊を編成し、また回天、咬砲などの特攻隊員の練成を行なった。

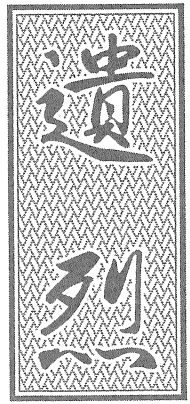
震洋特別攻撃隊は爆薬を装着して敵艦に体当たりする本造の小型高速艇で7千隻が西太平洋全域に配備され、北回コレヒドール島沖で米駆逐艦四隻を撃破したほか沖縄でも最も困難な状況のもとに敵の敵重なる警戒を突破して特攻攻撃を敢行した。伏電特別攻撃隊は単身潜水し水中から攻撃する特攻隊でこの地で訓練に励んだ。

今日戦士から蘇生した日本の復興と平和の姿を見るとき、これひとえに御等殉国の英霊の加護によるものと我等は景仰する。

ここに戦跡地コレヒドールと沖繩の石を併せて、ゆかりのこの地に特攻殉国の碑を建立し遠く南海の果てに若き生命を惜しみなく捧げられた御等の崇高なる遺業をとこしえに顕彰する。

昭和42年5月27日

元隊員一同 志一同



表題は、当協議会の参加団体である「特定非営利活動法人ジェイワイエムエイ」(英文表記「Japan Youth Memorial Association」略称「JYMA」(旧日本青年遺骨収集団)の機関紙(月刊)の題字であるが、その第101号(平成20年8月1日発行)に、去

る7月5日靖國神社において斎行された、当協議会並びに参加諸団体主催の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭に参加し、受付、案内等の業務を担当していただいたJYMAの若い学生さん達の手記が掲載されており、また、平成20年度の政府派遣戦没者遺骨収集団事業のうち、第247次硫黄島派遣隊に参加した隊員達の、いずれも感動的な記事が掲載されているので、御了承を得て転載させていただきます。

◆ ◆ ◆
大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭
 — 当法人から9名の学生が参加
○忘れてはいけないこと

青山学院大学一年 伊牟田真由子

今回初めて慰霊祭に参加し、大東亜戦争について大まかなことは認識していると思っていた自分が恥ずかしくなりました。今から約六十年前に起き、多くの死傷者が出て、日本は負けて…というように簡単に述べられるようなことではないということに気づいた。これからの世代に戦争の悲惨さや命の尊さ、平和であるという幸せについて語り継がなければならぬにもかかわらず、教科書のような知識しか持っていない自分は失格だなと感じた。

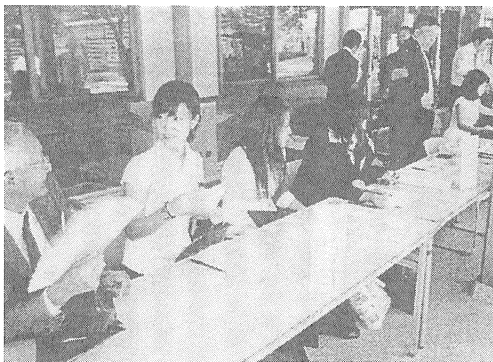
私が最も印象深かったことは、国歌斉唱だった。国歌について意義を考えたこともなければ気持ちを込めて歌ったこともなかった。サッカー競技場で選手が歌ったり学校の入学式で生徒が歌ったりする国歌とはまるで違う歌のようだった。なぜか涙が止まらなかった。

直会で色々な方々とお話をする機会があり、衝撃を受ける話も多かった。中でも私はシベリア抑留についてお話を伺った時、とてもショックだった。私にとってシベリア地域は未知の領域であり、バム鉄道の話聞いた時は信じられなかった。

これまで私は、バム鉄道は近年にロシア人が建設したもので、戦争とは全く無関係だと思いついてきたからだ。そして多くの先人が亡くなられたとい

うことは本当に信じ難かった。それと同時に私は何も知らずに今回の慰霊祭に参加していた自分が情けなくなり、先人や戦友・御遺族の方々にとっても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

今回の参加で戦争が持つ深い意味を少しでも理解したいと思うようになった。一生涯で全てを理解できるかどうか分からないが、これから様々な活動を通して考えていきたい。そして、国のために命を捧げた多くの方々のお陰で今の平和があるということを改めて実感でき、忘れてはいけないと思った。



慰霊祭の受付業務をしながら

○慰霊祭に参加して

国士館大学三年 犬塚 紋葉

去る七月五日に大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭に参加した。高校生の時に一度靖國神社へ行ったことはあったが、今回私が靖國神社を昇殿参拝するのは初めての事だった。

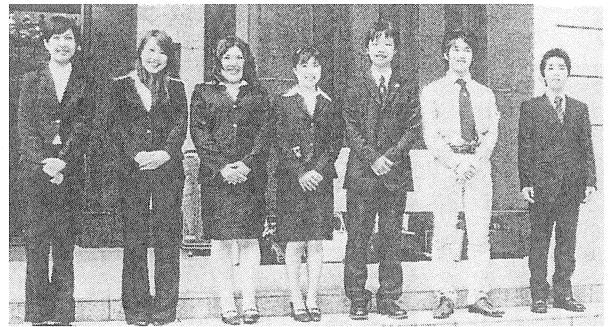
初めはこの慰霊祭に参加するかどうか、とても迷っていたが、軽い気持ちで入る場所ではないと思っていたし、小泉内閣の時の靖國神社参拝についての他国の批判などを見ている、私は首相が参拝すべきではないという考えを持つていたからだ。私の浅い知識でこんなことを申し上げるのは本当に心苦しいが、テレビの報道などに踊らされていたのだと思う。しかし、そのような考えを打ち明けると、赤木理事長やJYMAの先輩である宮崎さんが、戦争に関するものや現在の靖國神社についての諸問題などの本をたくさん読ませて下さった。そして、それを読むうちに私の考えも変わってきた。でも実際のところ、何が正しいのか分からなくなってきた、というのが本音である。しかし、それを知るためにもこの慰霊祭のお手伝いはさせて頂くことに決意した。当日、行ってみると既に水交會の方が準備をして下さっていた。私たちは荷物を置いて指示に従ってそれぞれの持ち場へ着いた。私は一般の参拝者受付を水交會の永田さんと一緒にやらせ

て頂いた。とても優しい方で、海上自衛隊にいた頃のお話なども聞かせて下さった。受付が一段落して、私は初めてだったので、慰霊祭への参列を勧めて下さった。

まずお清めをして、拝殿へ入る。参列者は御高齢の方々ばかりで私たちが一番若かった。席へ着くと、まず最初に国歌斉唱をした。私はこの時点でとても感動を受けた。私が知っている国歌斉唱と言えば、運動会や卒業式などでの皆の歌っているのかわからないのかわからないようなものだったが、この日聞いた国歌斉唱は、私に今までにない気持ちを与えた。あの境内が国歌でいっぱいになって、きつと歌う人たちそれぞれにいるんな想いを抱いて今日この場に來たであろうことが、その一瞬にして感じ取れた。そして、私はこの時、タイムスリップをして先人の国家に対する愛やその頃の国民の団結を感じていた気がする。

その後も『海ゆかば』や『千の風になつて』を歌い、いよいよ本殿に昇殿参拝した。二礼二拍手一礼。御英霊に気持ちを含めて参拝させて頂いた。

この日の経験は、私の今までの考えを払拭し得るものであり、とても貴重な経験をさせて頂いた。年に一度催される慰霊祭であるが、来年もまた参加



慰霊祭に参加した学生

し、御英霊に感謝の意を表したい。

最後になりましたが、今回の慰霊祭でお世話になりました全ての方々へ深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

○今日の平和日本に問う

第247次硫黄島派遣隊

国士館大学三年 景山 智久

硫黄島、溢れる程沢山存在する緑とカンバスに描いたような空と海、一目で水平線がはっきりと分かる、とても美しい孤島である。一方、この島では

日米両軍による熾烈な戦いが行われ、多くの血が流された激戦地であり、島全体が此処で亡くなられた方々の墳墓の地であると言っても過言ではない。私は戦争を経験したことも見たことさえない。その立場から硫黄島の土を踏み、遺骨収集をさせて頂いた。

本土から硫黄島へ着くと、先発隊の皆様が我々後発隊を出迎えてくださった。荷物を運んでいると暑さを感じずにはいられない。何せ飛行場の滑走路を見渡すと、陽炎がゆらゆらと揺れ、硫黄島の暑さを物語っていたのだ。硫黄島の生活は自衛隊に合わせる。毎日規則正しい生活は、本土での私生活を改めさせられた。作業の前には、自衛隊の指揮の下で準備体操を行い、現場に向かう。

現場に着くと、日陰となるテントをビニールシートで作り、その後作業に取り掛かる。現場は、戦時に日本兵が利用していた人工壕とトーチカで、ミノザリレレーによって壕底が現れるまで土を掻き出す。

硫黄島の遺骨収集は、とにかく考える事が必要である。壕底まで土を掘り起こし、出て来た遺留品や壕内の広さ、また壕を利用した目的を考えて作業に見切りを付けるか否かの判断がなくてはならない。当時の正確な資料が残さ

れていない硫黄島では、その方法で作業を進めないと、作業は困難を極めてしまうのである。

私は収集時に幾つもの銃弾を発見した。本土で生活をしていると、余程の事がない限り、銃弾など見付かるはずがないのだが、硫黄島の土をシャベルで掘ると、土と一緒に銃弾が出てくる。時折鈍い音がして確認すると不発の砲弾にシャベルが当たる。私はそこで初めて硫黄島戦の激烈さを知り、満足に戦後処理が終わっていない事を把握した。お迎えした御遺族の姿は、とても悲しんでいるように見えた。きつとお迎えした御遺骨が御自身の肉親に思っていたのであろう。

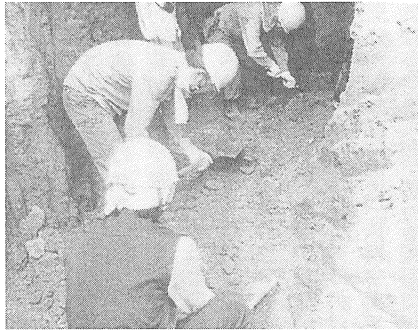
今日、水道の蛇口を捻れば水は何時でも手に入る。戦跡巡りで訪れた銀明水では、その僅かな水で命を繋いでいた事や、夏には冷房が効いて当たり前の現代の病院と硫黄島の医務課壕とを比べると、壕内の温度は四十度近くあり、体を休めるにも暑さで体力を蝕まれる程過酷な状況であった事を知らされる。これらの戦跡を訪れ、今の私達の生活は何不自由なく与えられているものだと痛感させられた。

世界的にも有名なニュースになった秋葉原通り魔殺傷事件に関しても、容

疑者は平和過ぎる日本の生活から人の痛みを悟る事が出来なくなり、軽々と人の命を奪ってしまったのではないだろうか。

今私達が置かれている生活を決して粗末に扱ってはならないと、この硫黄島派遣を通じて実感させられた。

派遣期間中には、御遺族の金井さんや和田さんに遺骨収集以外の話もして頂き、とても充実した日々を送ることが出来、感謝に堪えない。また、厚生労働省を始め、派遣団の全ての方々には大変お世話になり、今回の硫黄島派遣で皆様から学んだ事を今後の生活に役立てて頑張ります。



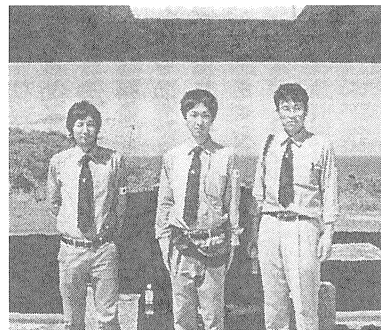
壕での土砂の掻き出し作業

○死してなお島を守る

会社員 鈴木 由充

それは、遺骨収集の作業日程もほぼ終盤に差し掛かった頃のことだった。トーチカを掘っていた重機班から「御遺骨が出た」との報を受け、第二班で発掘・収集作業に当たった。第一班がちょうど帰還の途につくところで、硫黄島協会の福田さんは、後ろ髪を引かれる様子で、後事を我々に託していった。それまで、私たちは主に北海岸の島民墓地あたりの調査・発掘を続けていたが、はかばかしい成果は上がらず、こういう地道な作業の積み重ねこそ大事なのだと思いを慰めるばかりであった。それが、最後の最後になって、御遺骨六柱が眠るトーチカが地中からその姿を現したのである。

海を望む見晴らしのいい砂浜に突如として現れた武骨なトーチカ。ここが、かつて弾雨飛び交う紛れもない戦場であったことを否応なしに思い知らされる。四十七ミリ速射砲が引き上げられた時、遺族会の金井さんが砲身をさすりながら嗚咽していた。お父さんのことを思っていたのだらう。金井さんのお父さんは別の速射砲大隊で戦死されていた。遺族でも何でも私は、もちろんそこまでの思い入れを抱くことはできない。しかし、少なくとも御遺族の方々の思いを心に刻み付ける努力はしなければと思う。それがその場に居合わせたい者の、そして次の世代を担う日本人としての責務ではないか。この遺骨収集への参加はもともと御遺族や元島民などの関係者に限られており、戦争に直接関係していない若い世代が参加できる窓口は唯一JYMAがあるのみである。これからますます戦争体験者が高齢化し、少なくなっていく中で、JYMAの果たすべき役割は大きいだろう。作業終了後、傾きかけた日差しの中で、白布に包まれた御遺骨の前に水を供え、全員で拝礼。遺骨袋を胸に抱いて宿舎への帰途についた。今回は御遺骨の数が多く、遺族の方だけでは抱



天山慰霊碑にて

かせていただくこととなった。

帰りの車中、御遺骨を胸にしながら「ああ、この方々の戦いは今、本当の意味で終わりを迎えたのだ」と思った。この方々は死してなお、暗い砂の中で護国の鬼となつて半世紀以上にもわたつてこのトーチカを守り続けてきた。それが今ようやくくにして役割を終え、祖国に帰ろうとしている。その方々の労苦に、私たちは、ただただ頭を垂れるばかりであった。

第247次硫黄島派遣隊(平成20年6月29日〜7月10日まで17日間)
JYMA派遣隊員

矢田雅紀(中央大学三年) 初参加
景山智久(国士館大学三年) 二回目
鈴木由充(社会人) 初参加

協議会参加団体の紹介

⑩ 豊橋・歩兵第十八聯隊会

○栄光と悲惨、赫たり惨たり、豊橋・歩兵第十八聯隊

歩兵第十八聯隊は、明治17年（1884年）7月、名古屋鎮台豊橋分営として創設され、翌8月15日軍旗を親授されてより60年、日清戦争に始まり、日露戦争、シベリア出兵、濟南事変、満洲事変、支那事変、大東亜戦争と、近代日本の戦争を、絶えず大陸の第一線にあつて、幾多の苦難を乗り越え、常に伝統の「突破精神」をもつて勇敢闘、赫々の武勲に輝き「突破聯隊」と誇称された。

その栄光と戦歴に輝く歩兵第十八聯隊の軍旗は、誇りある歩兵聯隊団結の核心として、弾丸雨注の中、幾多将兵の血に染まり、あらゆる困難を冒しつつ、身をもつて奉持され、その戦歴を物語るごとく竿頭の菊花の御紋章と紫の総のみとなつていたが、昭和19年7月25日、南ソロモンのグアム島（大宮島）守備部隊として、圧倒的に優勢な米軍を迎え撃ち、勇敢闘の末、最後の総攻撃を前に、青葉山の聯隊本部前において、第25代聯隊長大橋彦四郎大

佐以下全将兵の血涙のうちに奉焼された。明治17年8月15日の軍旗親授以来正に60年、第60回軍旗拝受記念日に先立つこと20日であった。

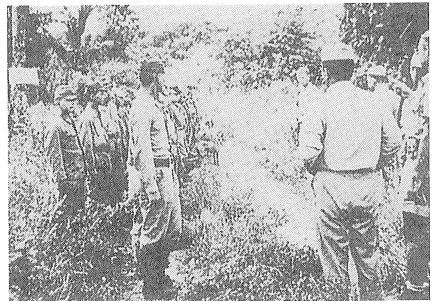
その最後の総攻撃によつて大橋聯隊長は壮絶な戦死を遂げ、軍旗奉焼の3日後には部下将兵の殆どが玉砕して、歩兵第十八聯隊は、その栄光の歴史を閉じた。



第25代聯隊長 大橋彦四郎大佐

だが、残存部隊はその後も、北部密林地帯に拠つて遊撃戦を続け、第三大隊副官山下泰裕少尉に率いられた60名の一隊は、翌昭和20年8月15日の終戦後、米軍の勧告に応じてようやく鉾を納め、9月12日に投降した。投降した将兵はなお威厳に満ちていたという。

なお、歩兵第十八聯隊の所属した第29師団（雷部隊）は、残存兵力を結集して北部密林地帯に転進し、持久戦を実行すべく移動を開始したが、米軍戦車の攻撃により7月28日、参謀長岡部英一大佐、次いで師団長高品彪中将も壮絶な戦死を遂げた。第三十一軍司令官



山下少尉らの投降
昭和20年9月12日、山下少尉に率いられた60名が投降した。将兵は威厳に満ちていた。

小畑英良中将は、8月10日大本営に対し、次のような訣別の電報を發し、翌11日、米軍戦車部隊の猛攻撃を受けて將兵の殆どが戦死し、小畑軍司令官も自らの拳銃で自決し、壮烈な最後を遂げた。

○大本営ニ対シテ

「不肖、軍司令官ノ重責ヲ受ケ、不眠不休努力セルモ、武運拙ク、サイパン以來常ニ戦ヒアラズ、今マタ大宮島ニオイテ苦戦ヲ続ケツツアルモ、指揮官少ナク兵マタ斃レ、武器壊レ、弾丸尽キ唯空拳アルノミ。大宮島確保ノ希望ハ絶タレントス。ココニ生存者全員トトモニ、又木山陣地ニオイテ明十一日最後ノ決戦ヲ決意ス。唯大宮島玉砕ノ報ヲ憂フルノミ。ワレラ一同ノ魂ハ永久ニコノ島ヲ守リ、皇國ノ安泰ヲ祈ル。」

幾多戦没將兵ノ遺族ニ対シテハ、誠ニ氣ノ毒ニ堪ヘズ、國家ヨリ救助ノ途ヲ講ゼラレントヲ特ニ願ヒス。
生存將兵ハ一同士氣旺ナリ。本十日一二〇〇以後、本國トノ通信ヲ絶ツ。終リニ皇國ノ發展ヲ祈ル。」

それより先、歩兵第十八聯隊は、昭和19年2月、関東軍・第二十九師団所屬部隊の南方転進に伴い、駐屯地海城を發つて釜山から宇品經由、船団を組んでマリアナ群島のサイパン島に向かったのであるが、途中、乗船の崎戸丸が敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて海没し、第24代聯隊長門間健太郎大佐以下1646名の戦没者を出し、救助された1700余名はサイパン島に上陸して戦力の回復を図り、防衛陣地の構築等に当たつたが、5月には1個大隊を残して南部マリアナのグアム島（大宮島）に移駐した。その残留した第一大隊は、新たに補充された第四十三師団に所屬し、6月15日の米軍上陸以來、圧倒的に強大な火力を持つ米軍と死闘を繰り返し、幾度か果敢な夜襲によつて米軍を海岸に圧迫したが、猛反撃によつて死傷続出し、タツポーチヨ山の陣地も陥ち、残存兵力はなお北地区の未完成複廓陣地に拠つて最後の抵抗を続け、遂に7月5日、サイパン島守備の陸海軍司令官は「ワレラ玉砕、モツテ太平

洋ノ防波堤タラントス。」との訣別の電報を大本営に発し、南雲海軍中将と斉藤陸軍中将は、洞窟陣地で悲壮な自決を遂げ、約3000の残存兵力は、7月7日、約6万7500余の米軍に向かつて死のパンザイ突撃を敢行して玉砕した。勿論歩兵第十八聯隊第一大隊の残存将兵の殆どもこの突撃で悲壮な戦死を遂げた。

ところが、それからおよそ一年半、あるいは島の北端に立て籠り、あるいは再びタツポーチヨ山にたむろして、言語に絶する耐乏と克己の原始的生活の中で、遊撃戦闘を続けながら生き抜いて、援軍の来る日待ち続けていた歩兵第十八聯隊衛生隊長大場栄大尉以下47名の将兵と邦人が生き残っていたのである。

昭和20年12月2日付けの「サイパン時報」は、次のように報じた。
「十二月一日午前八時、サイパン島二八〇六部隊広場で、山の籠城部隊として勇名をはせた陸軍大尉大場栄氏（歩兵第十八聯隊衛生隊長）以下四十六名の降伏式が挙行された。（日章旗を先頭に軍歌をうたいながら来る。）大場大尉指揮のもとに武装した日本兵の入場が終われば、サイパン島司令官ワイテング少将代理カージス中佐幕僚を随行して入場、茲に日米両軍の劇的

寸時の対面がおこなわれた。大場大尉以下の面には、高潮のうちに、さすが現実の大勢をよく洞察したもののごとく、一脈の明朝さがみなぎっていた。大場大尉よりカージス中佐に軍刀の贈呈がおこなわれ、続いて全員の武装解除がおこなわれた。かくて九時、きわめて厳肅裡に意義ある降伏式が終わった。サイパンビーコンならびにサイパン時報記者もこの式に参列できたのは、非常に意義深かった。

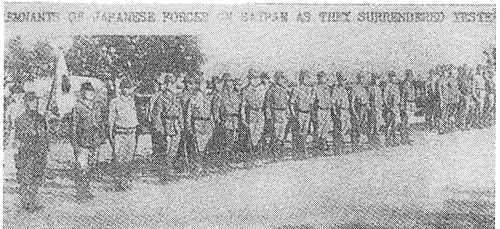
大場大尉以下は日本敗戦の事実を確認し、上官の命はこれ天皇の命として服従する伝統を誇る日本軍人への思いやりから、米軍司令官の斡旋により、パカン島司令官陸軍少将天羽馬八氏が上官として、無条件降伏命令書が手交されたことが、注目すべきである。

- 一 マリアナ群島サイパン島ニ於ケル日本軍降伏ニ関スル件
- 二 連合国側ニ降伏セル大日本帝國代表重光葵ノ調印ニヨリ、一九四五年九月二日以後、敵対行動を停止ス。
- 三 サイパン島ニ於ケル一九四五年十一月二十五日ヨリ、貴官ノ降伏準備ノ為、掃蕩ヲ停止ス。
- 四 貴官ノ奮闘ヲ賞ス。貴下指揮下ノ将兵ハ降伏ニヨリ、捕虜收容所ニ入レ、ジュネーブ条約ニヨリ待遇ス。
- 五 貴下ノ所持セル兵器資材ハ、総テ海

- 六 兵隊海軍中佐オヤード・カージスニ引渡し、捕虜收容所ニ移管スベシ。
- 四 貴下指揮下の衛生部員ハ、衛生部員トシテ待遇ス。
- 五 貴下指揮下ノ傷病兵ハ捕虜收容所及び軍病院ニ於テ治療スベシ。
- 六 左記へ署名シ、降伏の認メトシテ貴官ノ軍刀ヲ、海兵隊海軍中佐オヤード・カージスニ引渡スベシ。

一九四五年十二月一日
米軍海兵隊海軍中佐
オヤード・カージス
サイパン島日本軍敗残最高指揮官
陸軍大尉 大場 栄

歩兵第十八聯隊に関しては、これまでに幾つかの聯隊資料、部分的な戦史等

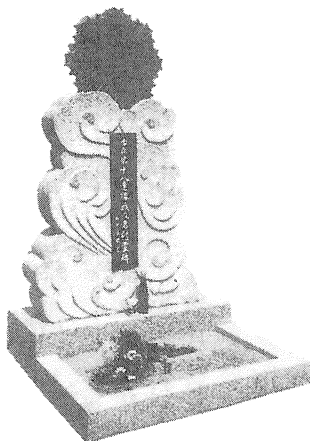


サイパン島最後の守備隊
昭和20年12月1日、歩兵第18聯隊衛生隊長大場栄大尉の率いる残存者47名は、17か月の苦闘の後、ついに米軍に降った。



大場栄大尉と
カージス中佐

が刊行されているが、これらを集大成して、「歩兵第十八聯隊史刊行会」から昭和39年10月1日に出版されたのが『歩兵第十八聯隊史』である。同書の著者は、故兵東政夫氏であるが、同氏は豊橋出身で、昭和17年、当時満洲・海城に駐屯していた歩兵第十八聯隊に現役入隊し、約1年後仙台予備士官学校に入校、幹部候補生として樺太駐在の部隊に勤務中終戦を迎えた。戦後慶應義塾大学文学部史学科を卒業して教員となり、豊橋市の中学校長、教育長を歴任され、市政、市史等歴史に関する編著書も多い。右の聯隊史も、多くの資料を駆使し、達意の文章で綴られているが、同氏は更にその後、新たな資料に基づいて大幅な改訂を加え、500頁に及ぶ改訂版『歩兵第十八聯隊史』を平成6年3月10日に発行された。その「改訂版あとがき」に同氏の戦友に対する思いを次のように記るされている。「私はこのたびの改訂にあたり、聯隊の一員として戦野に倒れたすべての将兵の姓名を本書に書き記し、その



グアム島の歩兵第18聯隊
将兵の慰霊碑
昭和53年7月25日、歩18会が
中心となって建立。礎石は豊橋
の原隊兵舎のもの。



サイパン島の歩兵第18聯隊
将兵の慰霊碑
昭和53年7月25日、歩18会が
中心となって建立。礎石は豊橋
の原隊兵舎のもの。

豊橋・歩兵第十八聯隊戦友会
代表 伊奈作一郎 (陸士58期)
〒443-0021
愛知県蒲郡市三谷町正迫25
☎0533-68-4809
(森重実業株式会社社会長
☎0533-68-6101)

「冥福をお祈りしたい思いです。聯隊が全滅して五十年、わが生命滅びてなお、人間の歴史の続くかぎり、聯隊と運命を共にしたすべての人たちの記録は留めておきたいのです」と。

以下は、「東愛知新聞」の「ふるさと再発見」と題する随筆シリーズの(3)に、『歩兵第十八聯隊史』の著者である兵東政夫氏が寄稿されたものであるが、同聯隊の赫たり惨たる歴史の一端を著すものとして掲載させていたのだ。

(飯田正能記)

「歩兵第十八聯隊」——1万人近い

将兵戦没 近代日本の縮図の一つ

元豊橋教育長 兵東政夫

吉田城跡に「豊橋公園」の門札。

むかし、ここに「歩兵第十八聯隊」

があった。いま辛くも残存する営門と哨所は、将兵たちの骸(むくろ)のように歴史の証人として葉桜の下にその影を落とす。

富国強兵の申し子として、この地に創設された聯隊は、近代日本と運命を共にし、外征七度、終戦一年前、南溟の孤島に玉砕して、ついに還ることはなかった。

明治維新の後、吉田城は兵部省に接収され、名古屋鎮台豊橋分営となる。

国内治安が一応回復されて、明治十七年の軍備増強により、新たに十個の歩兵聯隊が増設される。その一つの歩兵聯隊として、明治十七年(一八八四年)

八月十五日、歩兵第十八聯隊が名古屋で創設された。聯隊は翌年、翌々年に

かけて三万二千坪の豊橋分営に移駐、この地を営所と定めた。東におよそ六

万三千坪の八町練兵場があった。帝国憲法、徴兵令(のち兵役法)は

日本男子に兵役の義務を課した。徴兵検査の結果、三遠地方の壮丁は多くこの

聯隊に入営して二年間の軍務に服した。「地方社会」と隔絶された「内務班」

という特殊な規範と因習の兵営生活で、日夜教育と訓練が強行される。そこには「良兵は良民」という思想があった。

初年兵は木陰越しの豊川河畔や、日夕点呼前の灰捨場の脇(わき)にたたずんで父母を思った。入営・除隊や軍旗祭、秋季演習は軍民のきずなを強め、

聯隊は「十八」と呼ばれて人々に親しまれた。毎年の除隊兵は同年兵の誼(よしみ)も固く、予備兵役に服する

在郷軍人になって、地域社会に重きをなしていく。これは全国の全ての聯隊

が軌を一にする。しかし、昭和十二年(一九三七年)に日華事変が始まると、聯隊は名実とも

に戦闘集団に一変する。日清、日露の時もそうであった。事変が始まった

翌月の八月十四日、同山台地の工兵第三聯隊とともに聯隊に動員下令、現役

兵と召集兵で兵員は倍増、完全武装の将兵は大手通りから広小路を行進、上

海戦線に投入された。出動していった兵営では次々に部隊が新設され、戦場に赴いていったが、

一方で市民は、豊橋駅頭で無数の白木の箱と、白衣の傷病兵を涙で迎えた。

聯隊は大陸戦線に転戦五年、昭和十七年(一九四二年)九月、作戦半ばで

満洲の海城に移駐、関東軍の第六四七部隊と称して対ソ戦訓練に入る。駐留

一年半、昭和十九年二月、戦局全く非の中で絶対国防圏確保のため、突如マ

リアナ方面に転用される。家郷の人々はその通称号「雷」の部隊名も知ること

とはなかった。そして、聯隊は終戦一年前、凄絶な激戦の末、サイパン、グ

アム島で玉砕、このこともまた家族は知ることもなかった。

部隊創設以来六十年、延べ六万余の若者がこの聯隊の旗の下にあり、九千

九百余の戦没将兵を戦野にさらして、その悲劇の歴史を閉じた。

海戦線に投入された。出動していった兵営では次々に部隊が新設され、戦場に赴いていったが、

一方で市民は、豊橋駅頭で無数の白木の箱と、白衣の傷病兵を涙で迎えた。

聯隊は大陸戦線に転戦五年、昭和十七年(一九四二年)九月、作戦半ばで

満洲の海城に移駐、関東軍の第六四七部隊と称して対ソ戦訓練に入る。駐留

一年半、昭和十九年二月、戦局全く非の中で絶対国防圏確保のため、突如マ

リアナ方面に転用される。家郷の人々はその通称号「雷」の部隊名も知ること

とはなかった。そして、聯隊は終戦一年前、凄絶な激戦の末、サイパン、グ

アム島で玉砕、このこともまた家族は知ることもなかった。

事務局からの報告

○平成20年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」の催行

去る7月5日(土)、靖國神社において、当協議会が参加諸団体と共に催行した、平成20年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、天候にも恵まれ、多くの会員の皆様の御支援・御協力を得て無事終了することができました。誠にありがとうございました。

また、大勢の皆様様の御参列に心から感謝申し上げます。加えて今回は、全国籍々浦々の多くの会員の皆様から、在宅参拝の御意向に添えて、玉串料をお届け頂きました。戦没者慰霊に寄せられる皆様の熱い思いをひしひしと感じつつ、名簿を添えて神前に奉呈させていただきますました。御芳志誠にありがとうございました。ございました。

◇主催団体(あいうえお順)

- ・財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
- ・財団法人海原会
- ・英霊にこたえる会
- ・神奈川県僧行会
- ・興亜観音を守る会
- ・特定非営利活動法人ジェイワイエム

エイ(JYMA)

- ・震洋会
- ・全国甲飛会
- ・全ビルマ会
- ・財団法人太平洋戦争戦没者慰霊協会
- ・財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会
- ・東京ヤゴタ会
- ・東京都郷友会
- ・特攻殉国の碑保存会
- ・財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
- ・豊橋歩兵第十八聯隊戦友会
- ・歩兵第二二五聯隊戦友会
- ・山口県僧行会
- ・予科練雄飛会
- ・陸士第五十七期同期生会

今回は、当協議会の名誉総裁三笠宮崇仁親王殿下の御臨席が、御体調の御都合により取り止めとなったのは、誠に残念でしたが、林崎水交會会長、杉山新生つばさ會會長を始め、多くの御来賓に御参加いただき、盛会裡に式典並びに直会を催行することができました。また、現職自衛隊員では、航空幕僚長田毎神空将以下に親しく御参列いただいたことも感激でした。

式典参列者は175名、直会参加者は131名、在宅参拝者は444名を数えました。

また、昨年に引き続き、世田谷区民吹奏楽団、世田谷コールエーデ合唱団の御奉仕・御協力をいただきました。誠にありがとうございました。
なお、来年度の全戦没者合同慰霊祭は、平成21年7月4日(土)に催行の予定です。多くの皆様様の御参加をお願い申し上げます。

平成20年度合同慰霊祭 在宅参拝者(玉串料奉納者)名簿

(敬称略・あいうえお順)

相浦紀一郎	青木 組一	赤柴元五郎	小川 義昭	沖原 司朗	荻原 健一
赤梨 政人	阿久沢信吉	浅井 義正	長内 義臣	小澤 博勝	小畑 幸子
浅尾 正昭	阿部 進	阿部 敏行	小原 申造	小原 義行	鹿子島 淳
安部 光亮	阿部 秀夫	新井 郁男	梶原 初男	賀敷 伸	片桐 和嘉
新 忠信	新 朝一	有馬 典二	片山 正見	加藤 文城	加藤嘉之輔
有吉 英久	安藤 英雄	安藤 満	角折 幸輝	金子 英夫	金子 裕
安藤 裕	飯島 勇三	飯田 正行	上久保典良	神山 五郎	禿 慧猛
飯塚平八郎	池田 正治	池田 辰男	川井 正男	河上 滋	川久保収二
池田 省吾	生駒 隆	石井 泰三	川添 恵	川原 茂	川村 文子
石川 宰敬	石田 実	石田 修次	神崎 正	神田 正喜	神戸 豊
石原 金三	伊勢 三郎	市岡 実	木口 武男	菊地 洋	岸田 淳
市川 昇	市来 徹夫	市瀬 文人	北折 守男	北川 弘三	北園 豊志
伊東 能孝	稲垣 実	猪俣 淑郎	北村 信也	北村 昭正	吉川 裕男
指宿 清秀	今村 登	井本 尚宏	衣笠 勤二	衣笠 陽雄	木村 貴一
岩崎 礼三	岩田三千年	岩波 壽	大本 太助	鯨井 優直	楠 亨
岩宮 満	岩本 末治	宇井 忠一	楠 悌吉	口石 典啓	工藤 順三

多田	竹中	佐美	高村	高橋	高橋	高根	揃田	鈴木	鈴木	杉田	神保	白井	清水	柴田	信田	澤部	佐藤	佐藤	佐々木	櫻井	坂下	齋藤	小路	駒居	小林	小玉	小坂	熊谷	工藤		
康博	堅	旭	一男	義順	清	和成	秀一	昭	音吉	繁春	勝	彰	正一	莊松	安治	泰	三六	努	笹田	修五	邦弘	四朗	俱視	良一	静	政幸	清治	國彦	重民		
田中	竹原	武田	高山	高橋	高橋	高橋	平	諏訪	鈴木	杉野	菅原	新川	清水	島内	篠原	椎名	佐藤	佐藤	笹田	迫	坂爪	齋野	齋藤	小松	小林	小西	合屋	栗原	国枝		
慶夫	虎男	健策	富士三	正哉	吉三郎	鐵郎	悟	仙二	至	幸	春生	肇	貴之	キミ	重邦	初子	好之助	富士夫	毅	博文	力	二雄	悦太郎	嶺生	興孝	トシ子	雄二	達夫	春夫		
田中	竹村	竹田	田口	高松	高橋	高橋	高木	曾根	鈴木	鈴木	菅原	新郷	白石	清水	柴田	塩野	佐野	佐藤	佐藤	佐々木	佐久間	恵夫	齋藤	小松	小林	小貫	古賀	黒崎	久保		
正和	弘実	達	庄治	功和	義文	啓作	利男	正儀	敏	利孝	道之	勝亮	正	汪	邦雄	かね	光寛	千里	壽男	榮	恒和	恵夫	鎮男	利光	達夫	達雄	寛	昭二	辰美		
林	早川	浜田	花形	橋井	野原	野尻	西村	西垣	新名	鳴神	奈良	南雲	中山	中村	中村	永田	長嶋	長坂	永井	富永	徳富	寺田	出口	津覇	土田	塚本	近常	谷辺	谷垣		
恒材	尋匡	芳一	正美	勉	繁	昌秋	久宣	幸三	啓佑	長和	暁	芳郎	誠一	敏明	永寿	富三	時男	和雄	和雄	宮之助	三郎	富美雄	政行	実男	直也	弘満	正輝	勝啓	尚		
林	林	濱地	羽田	橋本	野俣	能登	西村	西原	新美	名和田	奈良	名古屋	中山	中村	中村	中谷	仲宗根	長澤	長岡	友枝	富田	照井	手島	坪島	筒井	津田	千葉	田村	谷川		
幹彌	陽一	信男	祐三	光彦	明	保	重一	重一	市郎	雄	泰夫	成田	夏井	佳暉	善治	健	剛	格	哲夫	哲夫	稔	吾	靖一	茂彦	正士	保昭	金助	光圀	義雄		
芳賀	林	浜部	濱田	廿日出	野村	野中	根岸	西村	西村	新倉	成田	夏井	中山	永本	中村	中濱	中島	中川	鳥山	富永	徳尾	寺澤	出口	堤	津田	津田	地場	田村	谷川		
誠治	雅之	明良	泰臣	昭信	幸平	一夫	康躬	清隆	進	憲充	一成	祐輔	重信	多美子	一雄	範夫	久光	巖	隆	桂	豊彦	英俊	次郎	彦男	治男	功	潤二	孝司	孝司		
八木	守屋	森	村山	椋田	三好	宮崎	宮川	三木	丸田	松本	松田	松尾	間瀬	蒔田	本多	細谷	星	船津	藤田	藤黒	福森	福場	深谷	平林	平居	日高	彦坂	原田	早田		
謙二	照雄	可成	太郎	幹雄	清子	松雄	経邦	輝雄	俊雄	豊次	幾郎	健章	三郎	稔	二郎	賢吾	康之	久子	弘道	陸夫	政雄	博	林三	克己	新市郎	伊三	健一	亮彦	亮彦		
矢口	守屋	森泉	母袋	牟田	向井	宮永	三宅	水野	丸原	松永	松島	町田	牧野	前田	本郷	星	古川	藤田	藤沢	藤井	福邑	福居	福居	廣瀬	平岡	秀嶋	菱沼	原田	早津		
滋子	廉造	英雄	健一	晃	彬	鐵郎	升信	完二	巧	忠範	忠範	速雄	保孝	暢彦	英雄	清滋	龍之介	賢二	十三男	常男	高彦	武彦	健三	辰夫	辰夫	定	俊雄	稔	順久		
矢澤	門間	森田	百目鬼	村岡	向井	宮森	宮崎	三苦	三木	松山	松野	松田	松浦	増谷	前村	本城	別府	布施	藤嶋	藤川	福本	福田	広本	平野	日比野	日高	原田	原田	原		
明	秀行	一雄	清	高昭	田一男	作造	喜一郎	和保	文之	芳正	一郎	信宏	登士郎	純雄	弘	勝利	千足	昭	弘行	忠重	梁之介	保光	清政	三郎	哲丈	誠	義治	明治	明治		
大河内	海老原	白田	上田	岩宮	井本	市来	石塚	池田	安藤	新	青木	青木	組一	阿部	敏行	新	忠信	朝一	有馬	典二	安藤	池上	池上	伊勢	伊勢	伊勢	伊勢	伊勢	伊勢	伊勢	
昭夫	富美枝	智子	興	満	尚宏	徹夫	司	辰男	哲	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	朝一	
昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫
昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫	昭夫

平成20年度合同慰靈祭
寄附者名簿

(敬称略・あいいうえお順)

安富 東洋 安光 久夫 山内 左善
山形 傳吉 山崎 卓 山田 慶夫
山中 弘美 山村 卓彦 山本 裕美
山本 精一 山本 政之 山本 健雄
横瀬 富一 吉岡 俊之 横倉 弘吉
吉住 泰明 吉田 租 吉川 俊治
吉田 豊 吉田 俊雄 吉永 安治
吉元 忠 米光 啓 萬 敏夫
若林 幹雄 和才 誠 渡壁 嗣朗
渡辺 博厚 渡辺 安光 渡辺 満
渡邊 瑞正 渡邊 匡介 和地 英磨

西進	南雲 芳郎	永本多美子	永井 和雄	富田 定幸	津覇 実雄	千葉 金助	田中 正和	竹田 達	高山富士三	高木 利男	鈴木 昭	鈴木 音吉	菅原 道之	嶋野 進	澤部 泰	佐藤 寿男	佐久間恒和	小林 静	栗原 達夫	工藤 重民	久世 秀夫	吉川 裕男	木口 武男	川井 正男	片山 正見	小沼 愛	小川 義昭	大山 権久	大淵 菊治
能登保野原	奈良 泰夫	中山 誠一	中村喜一郎	富田 裕行	出口 政行	地場 功	谷垣 尚	田澤 昌成	田口 庄治	高根 和成	曾根 正儀	鈴木 至	杉村 俊一	白石 正	篠原 重邦	佐藤 千里	博文 笹	坂下 邦弘	小島 啓三	国枝 春夫	鯨井 優直	衣笠 勤二	北折 守男	神崎 正	角折 幸輝	小畑 幸子	荻原 健一	緒方 研二	大穂 利武
繁	成田 一成	中山 重信	中村 佳暉	鳥山 隆	富澤 暉	津田 保昭	谷川 孝司	田中はづ江	武石 正友	高橋 清	揃田 秀一	鈴木 敏	杉山 蕃	新郷 勝亮	柴田 邦雄	佐藤好之助	笹 幸恵	坂爪 力	小玉 政幸	熊谷 春彦	口石 典啓	木村 貴一	北村 信也	金子 英夫	鹿子島 淳	長内 義臣	岡村 義久	大宮 利明	

花形 正美	羽田 祐三	濱田 雅之	早川 亮彦	早津 順久	萩原 初	原田 行平	日高 誠	伊三 晃	平野 三郎	福場 博	藤井 弥五郎	古嶋 福治	細淵 義信	萩田 稔	松尾 健章	松本 栄三郎	文之 昭春	三木 昭春	内 文之	丸田 俊雄	丸原 巧	宮崎 作造	村山 太郎	村岡 高昭	茂木 昌三	門間 秀行	安光 久夫	山口 芳丸	山本 裕美	山本 精一	米光 啓	若林 敏夫	若林 俊雄	若林 俊雄	英磨 渡邊	瑞正 巖	和地 英磨	渡邊 瑞正	渡邊 瑞正
-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	------	------	-------	------	--------	-------	-------	------	-------	--------	-------	-------	------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------

◇
◇
◇

新入会員名簿 (敬称略)

(6月1日～8月31日)

【賛助会員】 (あいいうえお願)

磯崎 好政	植田 好計	内山 好夫	大内 春巳	大音 正人	大山 権久	木村 慎	寒川 充夫	白濱 成明	館 勇	寺田 治夫	渾川 茂	松島 和男	森本 茂
-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-----	-------	------	-------	------

本年度会費納入のお願い

当協議会は、毎年10月に当該年度の
会費納入のお願いを、会員の皆様宛に
差し上げております。

会員の皆様には、本年度も年会費の
納入をお願いいたしたく、今回の会報
「慰霊」第11号の発送に合わせて払込
用紙を同封させていただきました。
なお、前倒して本年度会費を納入済
みの方には同封を省略しているはずで
すが、事務の手違いで払込用紙の同封
があった際にはお許しいただき、その旨
御連絡いただければ幸甚です。何とぞ
よろしくお願ひ申し上げます。

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、慰霊
事業の永続をはかるため、なるべ
く多くの方々の会員ご加入をお待
ちしております。

皆様のご協力をお願い致します。

会員の区分と年会費は次のとお
りです。

- 一 賛助会員
(本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円
- 二 賛助特別会員
(特別ご芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円
- 三 正会員
(本会の趣旨に賛同する慰霊目
的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇円
- 四 特別会員
(本会の趣旨に賛同する法人・
団体)
年会費 五〇〇〇円